

# ロマン主義時代の英国小説に描かれた女権論者メアリ・ウルストンクラフト

著者	鈴木 美津子
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/39822">http://hdl.handle.net/10097/39822</a>



---

ロマン主義時代の英国小説に  
描かれた女権論者メアリ・ウルストンクラフト

---

15520193

平成15年度～平成18年度科学研究費補助金  
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成19年3月

研究代表者 鈴木美津子  
東北大学大学院国際文化研究科教授

---

ロマン主義時代の英国小説に  
描かれた女権論者メアリ・ウルストンクラフト

---

15520193

平成15年度～平成18年度科学研究費補助金  
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成19年3月

研究代表者 鈴木美津子  
東北大学大学院国際文化研究科教授

## はしがき

### 研究組織

研究代表者： 鈴木美津子（東北大学大学院国際文化研究科教授）

### 交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 15 年度	1,800,000	0	1,800,000
平成 16 年度	900,000	0	900,000
平成 17 年度	500,000	0	500,000
平成 18 年度	500,000	0	500,000
総計	3,700,000	0	3,700,000

### 研究発表

- (1) 学会誌等（鈴木美津子「メアリ・ウルストンクラフトを擁護するーアメリカ・オーピーの『父と娘』に潜む急進主義的要素」、『国際文化研究科論集』、第13号、2005年12月）  
（鈴木美津子 シドニー・オーエンソンはいかにアイルランドを表象するかーミス・オハロランの哄笑、過去からの亡霊、裁判事件、『英国小説研究』第22冊、英潮社、2006年5月）

## 序章 メアリ・ウルストンクラフトを巡る論争 ——ペチコートをはいたハイエナか、ひたむきな女権論者か？

女性の経済的・精神的自立を説いた急進主義者メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-1797) は、フェミニズムの先駆的著作とされる『女性の権利の擁護』 (A Vindication of the Rights of Woman, 1792) において、エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) の主張する保守主義的言説を激しく批判し、女性を抑圧する男性中心社会を徹底的に攻撃した。彼女はその発言においてのみならず、実生活においても慣習に反逆する鮮烈な生き様をつらぬいた。彼女の死後、夫の急進主義者ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) は、妻の思い出の記である『女性の権利の擁護の著者の思い出』 (Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman, 1798、以下、『思い出』と略記) の中で、彼女の不倫の恋、未婚での出産、二度にわたる自殺未遂、別居結婚、信仰との決別などを、ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau) の『告白録』 (Les Confessions, 1782) にならって、あまりにも正直に赤裸々に綴った。ウィリアム・ゴドウィンは、彼女をあたかも感傷小説に登場する女主人公であるかのように<sup>2</sup>、「鋭敏で洗練された感受性」<sup>3</sup>の持ち主、情熱的に積極的に愛する「女のウェルテル」(『思い出』88)、急進主義的政治思想を抱く女哲学者、報われぬ恋のためには自殺も辞さない英雄的で悲劇的な女、として描写した。

### メアリ・ウルストンクラフトを巡る論争

メアリ・ウルストンクラフトは、『思い出』が刊行されるまでは、一般的には一応良識のある作家と見なされていた。たしかに、彼女の『女性の権利の擁護』が出版された当初、保守主義的見解の持ち主の中には、彼女を嘲笑する者もいた。たとえば、ホレス・ウォルポール (Horace Walpole) はハナ・モア (Hannah More) に宛てた手紙で、メアリ・ウルストンクラフトを「ペチコートをはいたハイエナ」、「哲学する蛇」とあざ笑い<sup>4</sup>、ハナ・モアのほうでも『女性の権利の擁護』という書名が「異様に馬鹿げているので絶対に読まない決意をしました」<sup>5</sup>という手紙を書き送っている。しかし、公の雑誌などで彼女の私生活に関してあからさまに個人攻撃がなされることはなかった<sup>6</sup>。ところが、先に

述べたように、ウィリアム・ゴドウィンの、あまりにも正直なメアリ・ウルストンクラフトの生涯そして私生活の提示は、凶らずも保守主義者に格好の攻撃材料を提供してしまった。その結果大変な物議を醸し、論議の的となった<sup>7</sup>。

急進主義者は、メアリ・ウルストンクラフトを自分の気持ち、信条に忠実で誠実な、積極的に恋する女、女性の権利の擁護者、社会体制の攻撃者として、理論を実践に移そうとした、啓蒙された女性として高く評価した。たとえば、ウィリアム・ブレイク (William Blake) は「メアリ」 ("Mary", c. 1803) という詩において、彼女の生き方・思想への共感を示し、ロバート・サウジー (Robert Southey) は『女性の勝利』 (*The Triumph of Woman*, 1795) を彼女に捧げた<sup>8</sup>。またシャーロット・スミス (Charlotte Smith)、メアリ・ヘイズ (Mary Hays) などの急進主義作家は、彼女を社会体制やあらゆる権威に果敢に挑戦する女性の権利の擁護者として称賛した。

保守主義者は、メアリ・ウルストンクラフトを、社会に脅威を与えかねない危険な女、結婚制度を否定し、次々と短い間に男性遍歴を重ねる浮気女、売春婦、自分に振り向いてくれない男性を——妻子があろうが、婚約者がいようがおかまいなしに——執拗に追いかける破廉恥な女、法律、慣習、伝統に挑む反社会的、個人主義的、反宗教的、破壊的行動を取る女として蔑んだ。保守主義者リチャード・ポルウェル (Richard Polwhel) は、彼女を女性の解放を叫ぶ恥知らずな雌ぎつねと嘲笑し、社会に脅威を与えかねない危険な女、浮気女、売春婦と蔑んだ<sup>9</sup>。また、保守主義作家ハナ・モアは『現代女子教育制度批判』 (*Strictures on the Modern System of Female Education*, 1799) において、メアリ・ウルストンクラフトを「ドイツの自殺者ウエルテルの称賛者であり、擁護者」<sup>10</sup> と呼び、さらに「女ウエルテルは、姦通は正当と認められると主張した」 (『現代女子教育制度批判』1: 45) と激しく批判した。さらに、ジェイン・ウェスト (Jane West) もメアリ・ウルストンクラフトの生き様を「罪に満ちた生涯」<sup>11</sup> であると断定する。

保守主義派の雑誌『反ジャコバン評論』 (*Anti-Jacobin Review and Magazine*, 9, 1801) には、メアリ・ウルストンクラフトを娼婦として、ウィリアム・ゴドウィンを売春宿の主人として描いた詩「自由の光景」 ('The Vision of Liberty') が掲載された<sup>12</sup>。この詩の中で、ウィリアム・ゴドウィンは、妻のメアリの売春の実体が世間にまだ十分に知られていないと考え、妻が街の半分以上の男性と性的関係をもっていたことを世間に知らしめるために筆をとったと述べられ、『女性の権利の擁護』は、「売春を宣伝するために抜け目なく作った文書」であると語られる<sup>13</sup>。ようするに、メアリ・ウルストンクラフトは急進主義理論の実践者——特に性的側面の——として位置づけられ、急進主

義理論と性的逸脱・不道德が結びつけられ、急進主義哲学は売春と、メアリ・ウルストンクラフト自身は娼婦と同義語となる<sup>14</sup>。

かくして、メアリ・ウルストンクラフトの生き様・人生は小説の格好の素材となり、当時の作家達に思想の戦いの場を提供した。この時代に活躍した小説家達は、イライザ・フェンウィック (Eliza Fenwick) やメアリ・ロビンソン (Mary Robinson) などの急進主義作家もハナ・モアやジェイン・ウェストなどの保守主義作家も、こぞって小説の中で、メアリ・ウルストンクラフトを想起させる女性を登場させ、彼女の実人生、著作に直接的、間接的に言及し、さらには『女性の権利の擁護』における主張を一語一句そのまま引用し、彼女が体現する急進主義思想・言説に対する擁護、称賛、支持、共感、あるいは軽蔑、怒り、反発、批判を表明したのである。

### **本研究の学術的特色・独創性**

メアリ・ウルストンクラフトとロマン主義時代の小説との関連・影響を論じる場合、これまで主に『女性の権利の擁護』で主張された女子教育理論、女性観などが当時の小説にいかに取り入れられているかという観点から考察されることが多かった。彼女の実人生・生き方そのものが当時の小説にある種の枠組みを与えているということに関しては、マリリン・バトラー (Marilyn Butler)、ニコラ・J・ワトソン (Nicola J. Watson)、エレノア・タイ (Eleanore Ty) などの研究書で時に指摘されはするものの包括的な研究にはほど遠い。従って、メアリ・ウルストンクラフトの人生・生き様そのものがこの時代の小説の知的・思想的下部構造を成していることを探ることは、この時代の小説研究に貢献するものであり、この時代の小説の作品理解がより深化し、明確になると思われる。

## 第一章 ロマン主義時代の小説に描かれたメアリ・ウルストンクラフト

1790年代、1800年代のいわゆるロマン主義時代に活躍した小説家たちは、急進主義者も保守主義者もこぞってその小説の中でメアリ・ウルストンクラフトに直接的、間接的に言及したり、彼女を想起させる女性を登場させたりして、彼女の自由な生き方に対するある思いをさりげなく提示した<sup>15</sup>。本章では、明らかにメアリ・ウルストンクラフトをモデルにしていると思われる女性——彼女達の共通項は、みな鋭敏な感受性の持ち主であり、女性の権利を主張し、女性の方から積極的に愛の告白をおこない、家父長制社会の基礎とも言うべき結婚制度を弾劾し、報われない恋に苦悩して自殺をはかることも厭わない、というものであるが——の登場する小説を手がかりにして、男性優位の当時の社会がメアリ・ウルストンクラフトに象徴される自立した女性にいかなる反応を示したのかを考察し、あわせて当時の女性観を抽出してみたい。

ロマン主義時代の小説にはメアリ・ウルストンクラフトをモデルにしていると思われる女性が多々登場する。メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの思い出』 (*Memoirs of Emma Courtney*, 1796) に登場するエマ・コートニー (Emma Courtney)、チャールズ・ロイド (Charles Lloyd, ) の『エドモンド・オリヴァー』 (*Edmund Oliver*, 1798) に登場するガートルード・シンクレア (Gertrude Sinclair)、エリザベス・ハミルトンの『現代の哲学者の思い出』 (*Memoirs of Modern Philosophers*, 1800) のブリジッティーナ・ボザリム (Bridgetina Botherim)。マライア・エッジワスの「アンジェリーナ」 ("Angelina", *Moral Tales*, 1801) に登場するレイチェル・ホッジズ (Rachael Hodges)、ペンネームはアラミンタ (Araminta)、『ベリンダ』 (*Belinda*, 1801) のハリオット・フリーク (Harriot Freke)、『リーアノーラ』 (*Leonora*, 1806) のレディー・オリヴィア (Lady Olivia)。アメリア・オーピー (Amelia Opie, ) の『アドライン・モーブレイ』 (*Adeline Mowbray*, 1804) の同名の主人公アドライン・モーブレイ (Adeline Mowbray)、ファニー・バーニー (Fanny Burney, ) の『放浪者』 (*The Wanderer*, 1814) のエリナー・ジョドレル (Elinor Joddrel) など<sup>16</sup>。本章では、エマ・コートニー、ガートルード・シンクレア、ブリジッティーナ・ボザリム、ハリオット・フリーク、アドライン・モーブレイ、エリナー・

ジョドレルを取り上げ、彼女達がいかに描かれているかを検証してみたい。

### メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの思い出』

急進主義作家メアリ・ヘイズは、メアリ・ウルストンクラフトとウィリアム・ゴドウィンの友人であり、自己の政治信条を表明するために、小説を書いた。『エマ・コートニーの思い出』は彼女の半自伝的小説であり、女性の自立という問題を中心テーマに据えている<sup>17</sup>。女主人公のエマ・コートニーは、強靱な精神を持った情熱的な女性であり、愛する対象をたえず激しく追い求める。彼女はジャン＝ジャック・ルソーの『新エロイズ』(Julie, ou la Nouvelle Héloïse, 1762)、メアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』、ウィリアム・ゴドウィンの『ケイレブ・ウィリアムズ』(Caleb Williams, 1794)、トマス・ホルクロフト(Thomas Holcroft)の『アナ・セント・アイブズ』(Anna St. Ives, 1792)などの1790年代の急進主義的著作を読み漁り、理論武装する。彼女は男性と同じ高等教育を受ける権利、女性の性的自由、女性の権利を声高に唱え、「世間の慣習が女性を隷属させ、力を奪い、墮落させるのです」<sup>18</sup>と叫ぶ。ルソーの『社会契約論』(Le Contrat social, 1762)の「人間は自由なものとして生まれた。しかしいたるところで鎖に繋がれている」<sup>19</sup>を想起させる鎖のイメージを用いて、彼女は因習に満ちた家父長制社会を激しく糾弾する。

残酷な偏見。不運な女性。なぜ私は商業に携わったり、専門職に就いたり、労働に従事したりできるように教育されなかったのでしょうか。なぜ女性は社会の慣習によって、このうえもなく堅固な鎖に繋がれているのでしょうか。

(『エマ・コートニーの思い出』31)

彼女はまた女性も男性と同様に自分の愛する人に愛を告白し、求婚する権利があると主張する。ウィリアム・ゴドウィンは『思い出』の中で、メアリ・ウルストンクラフトは「自分の愛情を育てる(ことに)……何の制約も受ける必要がないと考えていた」(『思い出』88)と述べている。かくして、メアリ・ウルストンクラフトがイムレイをひたすら追い求めたように、エマ・コートニーも自分の愛に答えてくれないオーガスタス・ハーリー(Augustus Harley)をひたむきに追い求め、当時の慣習を無視して、彼女の方から同棲することを提案する。メアリ・ヘイズは、女性の権利を主張し、滑稽なほど自己の感情、衝動に忠実に生きる、いかにもメアリ・ウルストンクラフト的的女性であるエマ・コートニー

を小説中できわめて好意的に描いている。しかしながら、この真摯で猪突猛進のエマ・コートニーは、この後幾度となく保守主義作家によって、その小説中で嘲笑され、戯画化されることとなる。

### チャールズ・ロイドの『エドモンド・オリヴァー』

チャールズ・ロイドが「広告」で述べているように、『エドモンド・オリヴァー』は「現代の哲学者の間で主張されていること」<sup>20</sup>、すなわちウィリアム・ゴドウィンの『政治的正義』(An Enquiry Concerning Political Justice, 1793)における主張、つまり結婚制度の全面的否定、内縁関係、同棲の勧めなどを、社会の秩序を破壊するものとして攻撃することを小説の意図としてもつ。『エドモンド・オリヴァー』の女主人公ガートルード・シンクレアは、きわめて情熱的で積極的で「大胆な」(『エドモンド・オリヴァー』1: 16)急進主義を信奉する女性である。「偏見によって支配されないようにしましょう」(『エドモンド・オリヴァー』1: 35)、「私にとって約束は何を意味するのかしら。約束って何かしら。精神に対する罨、枷だわ」(『エドモンド・オリヴァー』1: 47)と偏見、約束、足枷など急進主義者がよく用いる用語——メアリ・ウルストンクラフトも女性が置かれている状況を述べる際に、「足枷、くびき」(『思い出』74)という語を用いている——を駆使して叫ぶ。

ガートルード・シンクレアの愛する人エドワード・ドイリー(Edward D'Oyley)は、フランス革命に共感を抱いている急進主義者である。彼は「プリストルの哲学者仲間を紹介され、すぐにその主張を吸収し」(『エドモンド・オリヴァー』2: 79)、「大改革のことや大多数の人々に共通の原理」(『エドモンド・オリヴァー』1: 151)、「階級差がこの地上から消滅する日」(『エドモンド・オリヴァー』1: 181)、「権利の平等」(『エドモンド・オリヴァー』1: 151)、結婚制度廃止について熱っぽく語る。彼女はドイリーの抱く思想に同調し、未婚のまま彼の子供を身ごもる。しかし、彼に捨てられ、失意のうちに出産し、錯乱状態のなかで服毒自殺する。保守主義小説の規則通りに、彼女は死の床で自分の生き方は誤っていたと反省する。ドイリーの卑劣な本性を知って、「(彼が)結婚に反対し、そして独立した精神の自由を妨げる障害物を嫌った理由が、今にしてよくわかります」(『エドモンド・オリヴァー』2: 77)と語る。「世間の偏見をはねつけ、しきたりを笑いのめし、明確に定められた週間、社会体制を見捨て、私は永久にあなたのものと、宣言した」(『エドモンド・オリヴァー』2: 76)のは、かくも卑劣な男のためだったのかとガートルード・シンクレアは悔やむ。

結婚制度を否定し、未婚のまま出産し、恋人に捨てられ、自殺を図るというガートルード・シンクレアの生き方には、メアリ・ウルストンクラフトのそれがそのまま反映されていることは言うまでもない。急進主義思想にかぶれて墮落したガートルード・シンクレアの破滅的で自虐的な行き方は、主人公エドモンド・オリヴァー (Edmund Oliver) と最後に結婚する、敬虔で慎み深いエディス (Edith Alwyne) と際立った対照をなしている。『エドモンド・オリヴァー』において、ガートルード・シンクレアの生涯を媒介にして、メアリ・ウルストンクラフト的女性や急進主義的信条に対してきわめて辛辣な批判が行われていることは、明白である。

### エリザベス・ハミルトンの『現代の哲学者の思い出』

エリザベス・ハミルトンは、1790年代の代表的な保守主義作家である。彼女の『現代の哲学者の思い出』は、ウィリアム・ゴドウィン一派を痛烈に批判、風刺した作品であり、1800年に出版されるや、二年間でたちまち三版を重ねた。メアリ・ウルストンクラフトとメアリ・ヘイズを想起させるブリジッティーナ・ボザリムは、醜く、愚かで、魅力に欠けた女性として設定されている<sup>21</sup>。彼女もまた、ルソーの『新エロイズ』や、ウィリアム・ゴドウィンの『政治的正義』、メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの思い出』などの急進主義的著作に親しみ、たえず、彼らの著作に言及し、急進主義思想で理論武装する。

なぜ女性と男性の間に違いがあるのかしら……女性の力が家事という卑しい仕事によって品位を落とされているというのは、なんと惨めで嘆かわしい状態なのでしょう。残酷な礼節という足枷によって、制約を受けている女性はなんと悲惨なのでしょう。卑しむべき卑劣な束縛！不正で嫌悪すべき圧制。圧制の冷酷な残酷さが女性に家族の世話を押し付けるのよ。でも、いづれ女性の精神が啓蒙されて、奴隷的な仕事を甘受しなくても良い時がやってくるわ<sup>22</sup>。

ブリジッティーナ・ボザリムは、足枷、制約、束縛、圧制という急進主義者好みの用語を用いて、当時の社会において一般的だった男女差別を弾劾し、家事労働を拒絶する。さらに続けて、女性には愛する人を探す自由もないと言う。

惨めで傷つけられている女性のために不正で厭うべき因習によって造られた残酷な足枷で、女性は鎖に繋がれているので、私の心と甘美に交じりあう心の持ち主を探しに行

く自由がないわ。野蛮な足枷！残酷な鎖！憎むべき社会状況！理性の時代が到来すれば、その時には女性は虚しくため息をつかなくても良いはずよ。

（『現代の哲学者の思い出』2：93）

ブリジット・ポーザリムは、人を愛したら、その気持ちを相手に打ち明け、愛情の対象を追いかけることを躊躇してはいけないという、まさにエマ・コートニーやメアリ・ウルストンクラフトを思わせる信念に燃えて、すでに恋人が彼女を振り向きもしないヘンリー・シドニー（Henry Sydney）を執拗に追いかけて、同棲する決意を一方向的に固める。彼女は雄々しく宣言する。

あなた（ヘンリー・シドニー）は、私のことを好きだということに目下気がついていないのよ。こんなに明白なことに、あなたがそういつまでも盲目でいるはずがないわ……私はそのことについて、語り、手紙を書き、議論し、あなたを追いかけるつもりよ。

（『現代の哲学者の思い出』3：105-6）

ブリジット・ポーザリムと対極に位置するのが、小説の最後で主人公ヘンリー・シドニーと結婚することになる、ハリエット・オーウェル（Harriet Orwell）である。彼女は理性的で優しく従順で貞節、「敬虔で、愛情深く、情け深く、純粹で美德の持ち主」（『現代の哲学者の思い出』2：125）。家事労働を嫌悪するブリジット・ポーザリムとは対照的に、ハリエット・オーウェルは「家事労働にはなんら奴隷的なところも不愉快なところもありませんわ……家事労働をして役に立っていると思うと有頂天になりますの」（『現代の哲学者の思い出』1：197）と主張する。彼女はまさに保守主義小説の女主人公に相応しい家庭的な女性である。急進主義思想を振りかざし、振り向いてもくれない男性を髪振り乱して追いかけるブリジット・ポーザリムを通して、メアリ・ウルストンクラフト的女性を徹底的に嘲笑することによって、エリザベス・ハミルトンは、急進主義思想をも笑いのめした。「現代の女性作家のかならずしもすべてが、メアリ・ゴドウィン（メアリ・ウルストンクラフト）の淫らな教義やMH（メアリ・ヘイズ）のようないっそう不品行な模倣者によって墮落させられていない証拠」を示すものとして、保守主義者が『現代の哲学者の思い出』を第一級の作品として誉め称えたのは、当然と言えよう<sup>23</sup>。

## マライア・エッジワスの『ベリンダ』

マライア・エッジワスは、先に挙げたように、メアリ・ウルストンクラフトを想起させる女性を何人か小説中で描いている。本論では、『ベリンダ』のハリオット・フリークに焦点を絞って考察する。ハリオットは男性用の乗馬靴を履き、男装し、テーブルを拳で叩いたり、大声で議論したり、街をうろつき廻ったりする。男性のような物言い、物腰をする人物である。彼女は当然のことながら、女性の権利の擁護者であり、フランス革命に共感し、現行の結婚制度を馬鹿にし、夫がいる身ながら、自由に男性と交際し、友人のドラクール令夫人 (Lady Delacour) に不倫を勧めたりする。「奴隷制度を憎みます。自由万歳！私は女性の権利の擁護者です」<sup>24</sup> と叫び、「現行の社会体制は根本的に誤っています」（『ベリンダ』230）と主張し、さらに「女がある男性を好きになったとき、なぜその人のもとに出かけて行って、自分の気持ちを正直に打ち明けないのでしょうか」（『ベリンダ』230）とメアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの思い出』を引用して、社会が女性に課した制約、しきたりを攻撃する。

『ベリンダ』において、マライア・エッジワスが望ましい女性として登場させるのは、女主人公のベリンダ・ポートマン (Belinda Portman) である。彼女は「大変教養があり（『ベリンダ』7）、個性的で的確な判断力に恵まれ、「分別があり、誠実で」（『ベリンダ』215）、「洗練された審美眼と活発な知性」（『ベリンダ』379）を持っている。彼女は密かに愛するクラレンス・ハーヴェー (Clarence Hervey) が他の女性と婚約したという話を聞いても、彼のことをただひたすら思い続ける、賢明で慎み深い女性として描かれており、まさしくハリオットとは対極に位置している。ハリオットは小説の結末では皮肉にも、桜桃泥棒を捕まえるために仕掛けられた罠——急進主義者にとっては圧制の象徴——にかかって足を怪我し、二度と男装はできなくなる。急進主義者ハリオットのエピソードを通して、マライア・エッジワスがメアリ・ウルストンクラフトの急進主義思想と、ウィリアム・ゴドウィンが『思い出』の中で赤裸々に描いた、当時としてはきわめて自由で奔放な彼女の性行動を戯画化してみせたことは明白である。しかしながら、見逃してはならないことはマライア・エッジワスはこのメアリ・ウルストンクラフトを想起させるハリオット・フリークにある種の密かな共感を抱き、彼女を完全には否定しきれないでいることである<sup>25</sup>。

## アメリア・オーピーの『アドライン・モウブレイ』

アメリア・オーピーは、1790年代にはメアリ・ウルストンクラフトとウィリアム・ゴ

ドウィンの友人であったが、1804年に出版した『アドライン・モウブレイ』においては、ウィリアム・ゴドウィンの政治的急進主義思想、とりわけ結婚制度廃止論の論駁を試みている。女主人公のアドライン・モウブレイは、エマ・コートニーやブリジットイーナ・ボザリムと同じように、急進主義的著作——「ルソーの『社会契約論』や政治論文や哲学の体系にかんする書物」<sup>26</sup>——を讀破して理論武装し、女性も結婚せずとも性的関係をもつ権利があると考えに至る。彼女が愛するグレンマリ（Glenmmuray）は、「結婚制度を攻撃する」（『アドライン・モウブレイ』14）哲学者である。彼はウィリアム・ゴドウィンが『思い出』と『政治的正義』の中で、結婚制度を攻撃する際に用いた用語をそのまま借用して、「結婚制度の愚かしさ、邪悪さを指摘し、愛と尊敬の絆のみで結びつけられた結合がいかにかに幸福であり、純粹であるか」（『アドライン・モウブレイ』14）を説く。アドライン・モウブレイは、ウィリアム・ゴドウィンを想起させるグレンマリの著作を讀み、彼の結婚制度攻撃に魅了されていく。彼の思想に共感を示し、「結婚制度は愚かなもので、不正で、不道徳です」（『アドライン・モウブレイ』28）と宣言し、「私はそのような卑しむべき形式にけっして屈服はいたしません。神聖な絆を嫌悪すべき不必要な儀式によって汚しはしません」（『アドライン・モウブレイ』28）と主張する。

アドライン・モウブレイはグレンマリの思想に忠実に、駆け落ちし、結婚という儀式を経ずに同棲することを彼女の方から提案する。ところが、理想の生活と思っただけは、実は大変な苦痛に満ちた生活であり、特にアドラインが未婚のまま出産してからは、その生活は悲惨で屈辱に満ちたものとなる。未婚の母になったことで社会的に孤立し、大変な辛酸をなめる。最後には、『エドモンド・オリヴァー』のガートルード・シンクレアと同様、社会通念に刃向かった自分の傲慢な生き方を後悔する。

結婚制度は賢明なもので、神聖な制度であるべきだというのが現在の私の意見です。私は性急で未熟な18歳の判断でもって、そしてどんな年齢でもけっして許されない不遜さでもって、長年の尊敬すべき経験に逆らって思考し、行動し、自分では美德の擁護者であると信じていたときに、世間の目には悪徳の実例となっていたのです。

（『アドライン・モウブレイ』244）

アドライン・モウブレイは、娘を母に託して死ぬ。彼女とグレンマリの関係は、ウィリアム・ゴドウィンが『思い出』の中で赤裸々に語った彼自身とメアリ・ウルストンクラフトのそれを下敷きになっていることは言うまでもない。『アドライン・モウブレイ』は急進

主義理論がいかに性急で危険であるかを女主人公アドライン・モウブレイの悲劇的人生を通して警告を発している。しかし、作者のアメリア・オーピーは、アドライン・モウブレイを単なる攻撃、非難、揶揄の対象としてはいない。それどころか、彼女を非常に真摯で魅力的な女性として描いており、彼女の死に悲劇的崇高ささえ帯びさせている。ここには、アメリア・オーピーのメアリ・ウルストンクラフト的な女性に対するある思いが感じられる。

### ファニー・バーニーの「放浪者」

ファニー・バーニーの四作目の長編『放浪者』は、フランス革命時に時代が設定されている。急進主義を信奉するエリナー・ジョドレルは、「善良な気持ちの持ち主で、優れた才能があり、感情が豊かで」、<sup>27</sup>「新しい、自由奔放な珍しいものに惹かれる傾向があります。彼女は自分のことを女性の擁護者であると思っています」（『放浪者』165）と描写されているように、想像力豊かで、情熱的、衝動的で、女性に課せられた抑制・抑圧を撥ね除けて行動する女性の権利の擁護者である。フランス革命に共感し、「フランス革命は世界でもっとも素晴らしいものです」（『放浪者』69）、「古い世界をほとんど焼き尽くし、灰から不死鳥のように新しい世界を生じさせた気高い炎なのです」（『放浪者』152）と断言する。革命思想のおかげで、自分は「吟味されたいない意見を支持し、軽蔑している偏見によって支配されるという精神の奴隷から解放されました」（『放浪者』173）とフランス革命を賛美する。また、彼女はエマ・コートニーのように、「女性の権利」（『放浪者』175）を主張し、女性に課せられたあらゆる制約からの解放を唱え、「あらゆる束縛からの自由」（『放浪者』174）、「あらゆる儀礼の無視」（『放浪者』174）を宣言する。「ならわしとは何という強情な専制君主でしょう……私達は法律と愚かさの奴隷です」（『放浪者』174）、「なぜ女性は勇気を発揮することを排除されているのでしょうか。なぜ女性だけが自分が偏見をすてなさいその一員である国家の安全を協議することを否定されているのでしょうか」（『放浪者』177）、「偏見を捨てなさい。あなたが価値のない女性であるということを忘れなさい。そして一個の活動的な人間であるということを思い出しなさい」（『放浪者』397）と女性も男性と同じ人間であり、女性も政治的活動に従事する権利があると主張する。

エリナー・ジョドレルはエマ・コートニーやブリジッティーナ・ボザリムと同様、女性がある男性を愛したら、慎みや恥じらいを捨てて、自分の気持ちを率直に打ち明けるべきであるという強い信念をもつ。「あなたを愛しているわ」（『放浪者』174）と、実はジュ

リエット・グランヴィル (Juliet Granville, 自称 Miss Ellis) というすでに愛する女性がいるアルバート・ハーリー (Albert Harleigh) に愛を告白し、彼を当惑させる。エリナー・ジョドレルは自分の気持ちに答えてくれないアルバート・ハーリーを執拗に追いかけ、自殺すると言って彼を脅かす。胸に短剣を突き刺し、夥しい血を流しながら「自発的な自己消滅という崇高な行為の中で、私はあなたに対する称賛の念を宣言することを喜びといたします」(『放浪者』361)と彼女は叫ぶ。彼女は三回自殺を試みる。一度目と二度目は短剣で、三度目はピストルで。エリナー・ジョドレルの失恋による自殺未遂は、ウィリアム・ゴドウィンが『思い出』の中で描いた報われぬ恋ゆえの自殺未遂の戯画化、滑稽化であることは明白である。エリナー・ジョドレルの自殺未遂を途方もなくグロテスクに描くことによって、ウィリアム・ゴドウィンの描いたメアリ・ウルストンクラフトの「冷静で慎重な決意による」(『思い出』97) 理性的な自殺未遂の崇高さは剥ぎ取られ、ずたずたにされてしまう。ファニー・バーニーが、メアリ・ウルストンクラフトの急進主義思想そして『思い出』に描かれている性的に放縦で自由奔放なき方を批判しているのは言うまでもない。

『放浪者』において、エリナー・ジョドレルと対比的に描かれているのは、賢明で淑やかで、繊細なジュリエット・グランヴィルである。ジュリエット・グランヴィルは経済的な自立を求めて苦闘するのであるが、彼女はけっして声高に女性の権利を主張したりせず、社会が女性に要求している礼節を守り、その結果数々の苦難に会うが、ひたすら耐え忍ぶ。ファニー・バーニーが、社会の慣習、しきたりを遵守するジュリエット・グランヴィルを家父長制社会における理想的な女性として描いているのは確かである。ところが、表面上のジュリエット支持を裏切って小説の所々にファニー・バーニーのジュリエット・グランヴィルのような女性に対するある種の迷い、躊躇、苛立ち、曖昧さが、そしてエリナー・ジョドレルに対する共感の念が噴出して来る。もちろん、時には常軌を逸した馬鹿げた行動を取り、声高に女性の権利を叫び、社会の慣習をもものともせず、自己の気持ちに忠実に行動するエリナー・ジョドレルの生き方にファニー・バーニーは両手を挙げて賛成しているわけではない。ましてや、理想の女性として褒め称えているわけでもない。しかし、アメリア・オーピーと同様、ファニー・バーニーも密かに多少躊躇しながら、メアリ・ウルストンクラフトを想起させるエリナー・ジョドレルに対して同情、共感の念を抱いていることは確かである<sup>28</sup>。

## メアリ・ウルストンクラフト像は否定されるか

1790年代、1800年代のいわゆるロマン主義時代の小説において、メアリ・ウルストンクラフトを想起させる女性は、『エマ・コートニーの思い出』のエマ・コートニーを除いては、みな否定的に描かれている。繰り返しになるが、『エドモンド・オリヴァー』のガートルード・シンクレアや『アドライン・モーブレイ』の同名の女主人公には、悲劇的な結末が与えられており、『現代の哲学者の思い出』のブリジット・ポーザリム、『ベリンダ』のハリオット・フリーク、『放浪者』のエリナー・ジョドレルは単なる戯画化、嘲笑の的として揶揄されている。しかも、『エマ・コートニーの思い出』のように、メアリ・ウルストンクラフト的女性を誉め称えた小説は、小説のみならず、作者もまた保守主義作家によって、滑稽化される道を辿る。

1789年に対岸のフランスで革命が勃発して以来、1790年代の英国は革命とその悲惨な結末を目の当たりにして、英国内の急進主義者の動きに警戒心を募らせており、その行動を封じるために、当時のピット (William Pitt) 政権は、抑圧的、反動的、圧制政策を取るようになっていた<sup>29</sup>。急進主義的なものに対する恐怖、不安が蔓延した英国社会において、劇場、情熱に我を忘れ、積極的・攻撃的に急進主義的発言を繰り返す、女性の権利を主張し、しきたりや慣習をものともせず、性的に自由に奔放に振る舞う女性がきわめて罪深き、危険な女と感じられたとしても当然と言えよう<sup>30</sup>。

### ロマン主義時代の望ましい女性像

メアリ・ウルストンクラフトのような女性が、これほど批判され揶揄されているところから、当時の社会で好まれた女性像がいかなるものかは、きわめて明白である。メアリ・ウルストンクラフト的女性とは、対極に位置する女性、本論で取り上げた女性を例の取れば、『エドモンド・オリヴァー』に登場するエディス・オルウィン、『現代の哲学者の思い出』のハリエット・オーエル、『ベリンダ』のベリンダ・ポートマン、そして『放浪者の』ジュリエット・グランヴィルのような、柔和で、温和、家庭的、自己否定的、淑やかな女性、ようするに、感情や衝動に駆られず、理性的・実践的に考察し、行動することができる女性、が望ましいとされた。

とは言え、メアリ・ウルストンクラフトのような女性が完全に否定されてしまったかという、そうではない。先に見たように、1800年代の作品である『ベリンダ』のハリオット・フリーク、『アドライン・モーブレイ』の同名の女主人公、『放浪者』のエリナー・ジョドレルの因習や慣習に囚われない言動は揶揄され攻撃されているにもかかわらず、作者のほのかな共感が窺われるからである。マライア・エッジワズ、アメリア・オーピー、ファ

ニー・バーニーのメアリ・ウルストンクラフト的女性に対する態度の曖昧さの中に、当時望ましいとされている女性像の揺らぎ、変化の兆しが多少窺えると言えよう。

## 第二章 メアリ・ウルストンクラフトを擁護する ——アメリア・オーピーの『父と娘』に潜む急進主義的要素

アメリア・オーピー、旧姓オルダーソン (Amelia Opie, née Alderson, 1769-1853) は、ロマン主義時代にもっとも人気のあった作家の一人であり、1790年から1828年の約40年間に33冊の小説を刊行している<sup>31</sup>。彼女の父ジェームズ・オルダーソン (Dr James Alderson) はノーリッジの著名な非国教徒の医師であり、人道主義的な知識人グループの一員であった。そのため、彼女自身もノーリッジの自由主義者達や、ウィリアム・ゴドウィン、メアリ・ウルストンクラフト、エリザベス・インチボールド (Elizabeth Inchbald) 等のロンドンの急進主義者達と親交があった。とくに、メアリ・ウルストンクラフトとは親しく、彼女が未婚の母であることが明らかになったとき、仲間の女性達のなかには彼女と袂を分った者もいたが、アメリア・オーピーは彼女との友情を保った<sup>32</sup>。1794年に急進主義者のトマス・ハーディ (Thomas Hardy)、ジョン・セルウォール (John Thelwall)、ジョン・ホーン・トゥック (John Horne Tooke) トマス・ホルクロフト (Thomas Holcroft) 等が大逆罪で逮捕され裁判にかけられた際には、アメリア・オーピーも傍聴に出かけ、トゥックが無罪を勝ち取ったときには、歩み寄って彼に接吻し、急進主義者の仲間であることを自ら示した<sup>33</sup>。

その後、彼らの間にはある種の恋愛感情が芽生える。アメリア・オーピーは友人に宛てた書簡で多少冗談めかしながら次のように述べる。「インチボールド夫人がおっしゃるには、世間では次のような噂が流布しているそうです。ホルクロフト氏は彼女に恋をしており、彼女はゴドウィン氏に、ゴドウィン氏は私に、私はホルクロフト氏に恋をしている、と！」<sup>34</sup>。しかし、結果的には1797年にメアリ・ウルストンクラフトとウィリアム・ゴドウィンが結婚し、アメリア・オーピーは1798年にロンドンの文学サロンと美術サロンを主宰する画家のジョン・オーピー (John Opie) と結婚した。結婚後、当時の英国の抑圧的・反動的な風潮もあり、彼女は急進主義者たちと距離を置くようになり、急進主義思想に対する彼女の見解も変容を遂げることになる<sup>35</sup>。夫の死後は父のもとに戻り、父の死後、1824年にはクェーカー教徒となり、創作活動は自然と縮小されることとなった。

アメリア・オーピーの2作目の作品『父と娘、散文によるある物語』 (*The Father*

and Daughter, A Tale, In Prose, 1801、以下、『父と娘』と略記)は、オリヴァー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の『ウェイクフィールドの牧師』 (The Vicar of Wakefield, 1766) などをその代表とする十八世紀後半に盛んに書かれたいわゆる「墮ちた娘の系譜に属する小説」 ('the seduced-maiden novel') ——誘惑に負けて身を持ち崩し哀れな末路を辿る女性の物語——であるとしばしば論じられてきた<sup>36</sup>。たしかに、そのジャンルに属する小説であることは否定できない。しかし、『父と娘』を1800年代初頭の政治的・社会的・文化的文脈のなかに置くとき、この小説の新たな側面が浮上してくる。先の述べたように、1798年にウィリアム・ゴドウィンが『女性の権利の擁護の著者の思い出』を刊行後、この『思い出』に記されたメアリ・ウルストンクラフトの生き方をめぐって、保守主義者と急進主義者の間に論争が巻き起こり、『父と娘』出版当時もまだ論争の余波は続いていたのである。

そこで、本稿では、『父と娘』も実はメアリ・ウルストンクラフトをめぐる論争・思想の戦いの戦列に連なる作品であり、この小説を媒介にしてアメリア・オーピーもこの論争に対して間接的な意思表示をおこなっていること、そして保守主義小説と解されがちなこの作品に<sup>37</sup>、実は急進主義的要素が多々潜んでいることを指摘し、この小説がさりげない形でではあるが、メアリ・ウルストンクラフト擁護の書に収斂していくことを検証してみたい。

## 『父と娘』とは？

『父と娘』がいかなる物語であるか、簡単に辿ってみよう。物語は、女主人公アグネス・フィッツヘンリ (Agnes Fitzhenry) が赤ん坊のエドワード (Edward) を胸にひしと抱き、凍りつくような寒さの中、父親の家を目指して歩いているところから、突然始まる。彼女は途中暗い森の中で足枷をつけた老人に出会う。アグネスの父フィッツヘンリ氏 (Mr. Fitzhenry) である。彼は、娘の恥ずべき不行跡により、精神に変調をきたし、自ら創設にかかわった精神病院に収容されていたが、病院を逃げ出して来て、奇しくも森の中で娘と再会したのである。しかし、彼は娘を認識できない。物語の前半は、アグネスが父親の忠告に背いて、貴族階級出身の若き士官ジョージ・クリフォード (George Clifford) の甘言に誘われ、誘惑に屈して、駆け落ちに同意し、未婚の母となり、あげくのはてに捨てられるにいたる顛末が回想形式で語られる。

物語の後半は、アグネスが自分の過去の行いを反省し、世間からは白眼視されながらも独力で生計を立て、父親の看病を献身的に続け、そのかいがあって七年後に父親は一時的

に正気を取り戻し、彼女と和解し、喜びの中で死ぬさまが描かれる。そして父親の後を追うがごとく、アグネスも、息子を一人残して息を引き取る。アグネスと彼女の父親の葬儀の日にアグネスを捨てたクリフォード―彼は今や爵位を継いでマウントキャロル卿 (Lord Mountcarrol) と名乗っているのだが、たまたま馬車で通りかかり、一人残されたエドワードを自分の息子と認知し、正当な後継者として屋敷に連れて行く。

誘惑に身を任せ、未婚の母になり、捨てられ、過去を悔やんで死ぬという物語展開から、先にも述べたように、『父と娘』はいかにも典型的な「墮ちた娘の系譜」に属する、保守主義的メッセージを発している小説のように思われる。しかしながら、子細に『父と娘』を眺めてみると、保守主義的枠組みをもつこの小説の中に急進主義的要素が多分に潜んでいることがわかる。女主人公アグネスの性格づけ、プロットの展開などに焦点を当てて、『父と娘』に急進主義的味付けがなされていることを見てみたい。

アグネスの性格、言動に急進主義的属性が付与されていることを見てみよう。アグネスは「感受性豊か」<sup>38</sup>で、「強靱な精神ともっぱら男性の属性と考えられている知識を獲得する能力」(『父と娘』2-3)の持ち主であると描写される。実は、この「感受性豊か」、「強靱な精神」、そして男性なみの知力、理解力というのは、まさしくウィリアム・ゴドウィンが『思い出』の中でメアリ・ウルストンクラフトの特徴的属性として述べているものである。この属性は、メアリ・ウルストンクラフトを思わせる急進主義を信奉する女性登場人物たちにも付与されている。たとえば、イライザ・フェンウィックの『秘密』(Secresy, 1795)の女主人公シベラ・ヴァラumont (Sibella Valmont)は、感受性豊かで、「力と不屈の精神」<sup>39</sup>を兼ね備え、男の子と同じ教育を施されたと描写される。急進主義作家メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの思い出』(Memoirs of Emma Courtney, 1796)の同名の女主人公も「鋭敏な感受性」<sup>40</sup>、「過度の感受性」(『エマ・コートニーの思い出』48)、「精妙な感受性」(『エマ・コートニーの思い出』60)の持ち主であると描写され、「私には行動の指針を形成する強靱な精神とその指針に則って行動する勇気があります」(『エマ・コートニーの思い出』44)と宣言する。チャールズ・ロイド (Charles Lloyd)の保守主義小説『エドモンド・オリヴァー』(Edmund Oliver, 1798)に登場する、急進主義思想に同調し、同棲し、妊娠し、恋人に捨てられ、失意のうちに出産する女主人公ガートルード・シンクレア (Gertrude Sinclair)も、感受性豊かで「独立した精神の持ち主」<sup>41</sup>と描写される<sup>42</sup>。また、「強靱な精神」も保守主義作家と急進主義作家では見解が異なる属性である。急進主義作家は、自己主張、すなわちあらゆる危険を冒してでも自己の意志を貫く能力という意味に用いている。一方、保守主義

作家は自制、つまり、自分の感情・衝動を抑え冷静、沈着な行動をとる能力、という意味に用いる<sup>43</sup>。エマ・コートニーやシベラは、強靱な精神力、知力を駆使して、自由に因習に囚われず、情熱的に愛する人を追い求めるわけである。他方、保守主義小説に登場する女主人公は、自分の置かれている立場を慎重に検討し、年長者を敬い、衝動のおもむくままに行動することは決してない。

アグネスの自殺未遂も実は急進主義的エピソードである。ウィリアム・ゴドウィンが『思い出』の中で、メアリ・ウルストンクラフトがイムレイへの報われぬ愛に絶望して、二度自殺を図ったことをきわめて率直に語ったことにより、保守主義作家にとっては自殺とメアリ・ウルストンクラフトもまた同義語となる<sup>44</sup>。さらに、当時は自殺は急進主義思想と直接的に結びつけられていた。というのも、急進主義者は、自殺を紛れも無く美德に溢れた行為として賞賛しており、フランス革命時には英雄的行為とも見なされていたからである<sup>45</sup>。そこで、たとえば、先に引用した『エドモンド・オリヴァー』に登場するガートルード・シンクレアも、失意のうちに錯乱状態の中で服毒自殺を図る。またファニー・バーニーも『放浪者』(The Wanderer, 1814)の中で、メアリ・ウルストンクラフトを想起させるエリナー・ジョドレル(Elinor Joddrrel)に、三度自殺を試みさせている。このエリナーの失恋による自殺未遂は、メアリ・ウルストンクラフトの戯画化、滑稽化であることは言うまでもない。

アグネスの場合は、かなわぬ恋に苦悩して自殺をはかるのではない。彼女は自分がいかに親不孝であるかを思い知り、ナイフで咽を突き刺して死のうとする(『父と娘』71)。このアグネスの自殺未遂は「強靱な精神力」のなす技であり、彼女の真摯で誠実な気持ちの現れとして描かれている。アメリア・オーピーはおそらく報われぬ愛に絶望して自殺するというのはあまりにも直接的にメアリ・ウルストンクラフトに結ぶ付くと考え、動機を少しづらしてはいる。

『父と娘』のアグネスは、先に挙げた急進主義小説の女主人公のように、父親の権威に激しく反抗したり、急進主義的言説を弄したりはしない。しかし、以上簡単にみてきたように、急進主義小説の女主人公のように、彼女は自らの意志で、弱さからではなくて、自己の情熱から、クリフォードに身を任し、その結果、未婚のまま出産する。その後は強靱な精神力を発揮して、決然たる精神、意志力でもって、世間の白眼視にも負けず、収入の道を見つけ、父の看病と息子の教育にあたる。奮闘するアグネスを、アメリア・オーピーは、あふれんばかりの清らかさ、美德の持ち主として描く。急進主義作家が墮ちた女性を描く場合、彼女達をいわゆる貞淑で道徳堅固な女性よりも、はるかに好感のもてる魅力的

な女性として描写するのが通例であるが、アメリア・オーピーも、急進主義作家の用いた人物造形を踏襲していることになる。

### 『父と娘』に潜む急進主義的言説

次にプロットの展開を見てみたい。保守主義小説では、誘惑に身を委ね婚前に性的関係を結んだ女性は、保守主義作家の激しい攻撃対象になっていた<sup>46</sup>。そのため、保守主義小説では、転落した・墮ちた女性は世間から爪弾きにされ、彼女を支援する人はほとんどおらず、やむをえず生活のために娼婦に身を落とし、最期は救貧院で過去の行動を悔やみながら息を引き取るという哀れな末路を辿るのが一般的である。つまり、保守主義小説においては、一度転落した女性をあまりにも簡単に許すことは逸脱した性行動を奨励することにつながるとし、転落した女性の更生は不可能であり、死がその必然の結果であるとした。一方、急進主義小説では、墮ちた女性に対する不当な偏見はきわめて有害な影響を及ぼすと主張した<sup>47</sup>。メアリ・ウルストンクラフト自身は、『女性の権利の擁護』において、婚前に性的関係を結んだ女性に対して、社会が不名誉、汚名、恥辱の烙印を押すことが売春蔓延の直接的な原因になっていると主張する。

貞節を失った女性は、自分はいくら以上墮ちようがない最底辺にまで墮ちてしまい、以前の社会的地位を取り戻すことは不可能であり、いかなる努力もこの汚点を洗い流すことはできない、と想像する。激励を失い、他の援助の手段を失って、売春が彼女の唯一の逃げ場になる。そして急速に墮落していく<sup>48</sup>。

アグネスは、もし彼女を支援する人たちが現れなければ、まさしくメアリ・ウルストンクラフトが危惧するような状況に墮ちかねなかった。

ところが、『父と娘』の場合には、転落後のアグネスの自立を助ける人々が、次々に現れる。アグネスのかつての乳母の娘ファニー (Fanny)、召使いのウィリアム (William)、かつての友人キャロライン・シーモア (Caroline Seymour)、彼女の父親のシーモア氏 (Mr Seymour) などである。アグネスの援助者で注目すべきは女性達である。女性同士が助け合う、女性の連帯は、急進主義者ヘレン・マライア・ウィリアムズ (Helen Maria Williams) の『ジュリア』 (Julia, 1790) や、メアリ・ウルストンクラフトの『女性の虐待』に描かれているように、急進主義的色彩を帯びる。ファニーとキャロラインはそれぞれ、アグネスが地域社会に再び受け入れられるように、様々な形で支援する

のである<sup>49</sup>。

ファニーは学校を経営し、またショール作りの仕事にも携わっている。ちなみに、ゲイリー・ケリーによれば、ファニーは、メアリ・ウルストンクラフトの若き日の親友ファニー・ブラッド (Fanny Blood) と忠実な名使いマルグリット (Marguerite) を合体した人物像であるという示唆的な指摘がなされている<sup>50</sup>。ファニーは、アグネスにさしあって住居と仕事、そして精神的支援を提供する。すなわち、アグネスを自分の家に住ませ、彼女にショール作りの仕事を世話し、子育てを手伝う。おかげで、アグネスはその後、編み物や刺繍の仕事も手に入れ、自分自身の家を持つだけの資金を蓄えることができる。さらに、アグネスを白眼視する地域社会の人々に、ファニーは彼女の高潔さ、誠実さを訴え、彼女に冷淡なそぶりを示す人たちを痛烈に批判・攻撃し、さらに「高潔な怒りで頬を紅潮させ、目には素朴な感受性に溢れた涙を浮かべ彼女 [アグネス] を弁護する」(『父と娘』139-40)。結局、アグネスは自分が同居していることで、ファニーの学校経営に差し障りが出てきたことを知って、ファニーの家を出て、ヒースの丘の上に立つコテージに移る。ファニーは、アグネスが引っ越した後も、引き続き夫共々彼女の力になっていく。

アグネスのかつての友人キャロライン・シーモアも精神的、物質的援助をおこなう。アグネスのために助力するキャロラインは、明らかに作者アメリア・オーピーの理想化された姿である<sup>51</sup>。キャロラインは、アグネスに手紙を書いたり、手紙のなかに紙幣を同封したりして経済的援助もおこなう。キャロラインのアグネスへの手紙もまた急進主義的色調を帯びている<sup>52</sup>。

素晴らしく説得力のある男女の作家たちは——私の意見ではこの作家たちは判断を誤っているのですが——次のことを証明しようとしていました。すなわち、多くの気立ての良い女性達が、ただ彼女達の最初の過ちが誤った判断と犯罪的な厳しさで扱われたばかりに、永久に美德と世間体を失い、売春の犠牲になるのだと。

(『父と娘』 166-67)

しかし、この作家達の主張は、キャロラインには「有害であり、危険であり」、また「誘惑の犠牲者を、後悔や改悛から遠ざけようとしている」ように思われる。さらに、「すばらしい努力により人々に自分の過ちを忘れさせることによって、一回の誤った歩みによって失った社会における地位を取り戻した女性」のケースをたくさん知っている、付け加える。「素晴らしく説得力のある男女の作家たち」とは、メアリ・ウルストンクラフトや

ウィリアム・ゴドウィンのような急進主義作家を指している。キャロラインは彼らを批判しているようでありながら、それにもかかわらず「転落した女性」には、更生する道が開かれているという急進主義的見解を述べる。この手紙は「アグネスの心に平和と希望を語りかけるように、……そして彼女の暗い目を自己に対する満足で輝かせるように意図されており」（『父と娘 169）、アグネスは「友情を証明する」（『父と娘』169）キャロラインの手紙により、心を慰められる。キャロラインのアグネスに宛てた手紙には、アメリカ・オーピーのかつて信奉した急進主義思想に関するある種の迷いが見受けられる。ともあれ、この手紙は『思い出』出版を機に凶らずも世間の批判・攻撃にさらされることになった今は亡きメアリ・ウルストンクラフトに対するアメリカ・オーピーの偽らざる気持ちを代弁しているとも言えよう。

キャロラインは、アグネスを援助することに最初はあまり乗り気ではなかった父親のシーモア氏にも協力を求める。キャロラインは父に「お父様、アグネスの擁護者になってくださいな」（『父と娘』115）と頼む。シーモア氏は、「彼女の擁護者だって！世間がなんと言うか」とためらう。キャロラインは「お父様が正しい判断者であるということ以外、世間はいったいなにを言うことができるでしょうか」（『父と娘』116）と主張し、「アグネスが無慈悲にも攻撃されているのを耳になさったときには、彼女の友人になってくださいね」（『父と娘』126）と再度頼む。たまたまあるお茶の会で、アグネスが噂話のたねにされているのを聞き、シーモア氏は、彼女の現在の状況、将来の望みなどを感動的に語る。シーモア氏の話聞いて「哀れで不幸な娘さん！彼女が過失を犯したとはなんて気の毒なんでしょう！——彼女は墮落したけれど、いまだにアグネス・フィッツヘンリですね」（『父と娘』129）と、心を打たれたパーティ参列者たちは叫ぶ。結局、アグネスは、彼女を酷評する人々はあるものの、「町の誠実で、偏見のない人たちは、アグネスの模範的な勤勉ぶりに注目し賞賛する」（『父と娘』160）。地域社会の人たちは徐々に彼女に心を開き、彼女を是認し、評価していく。

このように影になり日なたになりアグネスを援助する人々がいること、そして彼女自身の自立したいという強い意志により、彼女は独力で生計をたて、父と息子を養うだけの収入を得る。アグネスは、一家の長として、精神を病む父を扶養し、看病し、献身的に尽くすという展開も急進主義的色彩を帯びていると言えよう。

保守主義小説のプロット展開では、結婚前に身を任した女性は未婚の母となり、その後転落の階段を一気に転げ落ち、娼婦に身を落とし、最後には改悛し惨めにも死ぬというのが一般的であるが、急進主義小説の場合は、小説の結末がどれほど悲劇的であっても、女

主人公の過ちは好意的に受け取られる。急進主義作家は墮落した女性に同情の念を示し<sup>53</sup>、たとえば、小説の結末で死ぬことになろうとも、その死の様子はきわめて崇高に物語られる。たとえば、イライザ・フェンウィックの急進主義小説『秘密』において、女主人公のシベラは未婚のまま身ごもり、死産し、その数日後彼女自身息絶える。しかし、彼女の死は感受性と愛の殉教者として崇高に描かれる。一方保守主義小説の場合は、『エドモンド・オリヴァー』の女主人公レディ・ガートルードの場合のように、「彼女のお葬式は寂しいもので、冷え冷えとした死のような荒涼さがしのびよってくるのを感じた」（『エドモンド・オリヴァー』2：175）と、自ら転落した女性の末路がいかにか悲惨で哀れなものであるかを強調する。『父と娘』のアグネスの葬儀の様子は、どうであろうか。「アグネスと父の亡きがらは、男女の尊敬すべき住人たちの長い行列に伴われて墓地に運ばれた。苦しみと悲しみの多い貧しい人々が嘆きながら離れて葬列に付いてきた。アグネスが故郷に戻って来たとき、彼女に暴力的な振る舞いをした人達でさえ、彼女が永遠の住み処に運ばれるのを見て、涙した」（『父と娘』193-94）と描写される。そしてアグネスの不品行を厳しく批判した女性もアグネスの「不運と早い死」（『父と娘』194）を悼み、またアグネスを「この世でもっとも邪悪な女」（『父と娘』194）と呼んだ女性も自分のかつての行動を悔やむ。このようにいかにも急進主義小説を思わせるような筆致で、アグネスの死は悲劇的な崇高さでもって語られる。

アグネスは亡くなるものの、息子のエドワードはマウントキャロル卿によって息子と認知され、彼の正式の相続人となるという結末、さらに「アグネスがしたように転落した人はだれでも忍耐強く苦しみに耐え美德にあふれた努力をすれば、世間の尊敬を取り戻す可能性がある」という語り手の締めくくりの言葉中に、結局、アグネスは道徳的違反は犯したが、転落の罪は許されたことが示されている<sup>54</sup>。

### アメリカ・オーピーの用いた戦略

以上見てきたように、『父と娘』には急進主義的言説がちりばめられ、メアリ・ウルストンクラフトの見解を肯定するようなエピソードが散見する。では、なぜアメリカ・オーピーは、『父と娘』を一見すると保守主義小説と見紛うような枠組みをもつ作品にしたのか。当時は、中産階級の品位のある女性が、社会の批判を浴びずに、体面を汚さず、品位を保ったまま、メアリ・ウルストンクラフトの人生、ひいては彼女の著作を肯定的に取り挙げたり、賞賛したりするのは、極めて難しい状況にあった。とくにアメリカ・オーピーのように、かつて急進主義者と親しく交際し、その後急進主義思想から離れ、良識ある既

婚女性として世間に通っている場合、かつての友人がいかにかに誹謗中傷されていても、公然と彼女を擁護するのは難しい状況にあった。

そこで、アメリア・オーピーはある戦略を用いた。忘れてはならないのは、アグネスを積極的に援助する、ファニーとキャロラインは、アメリア・オーピー自身を含めてメアリ・ウルストンクラフトに個人的にゆかりのある女性たちがモデルになっているということである。アメリア・オーピーは自分の気持ちをこの女性達に託して、メアリ・ウルストンクラフトに対するひそかな友情の証を示していると言えよう。つまり、アメリア・オーピーは、『父と娘』において、一見すると保守主義的メッセージを発するかに思われる「墮ちた女性」という小説ジャンルを巧みに利用し、その枠組みに沿うかのように見せかけて、実は女主人公アグネスを援助する女性達を配し、メアリ・ウルストンクラフトの主張に賛同するようなエピソードを組み入れ、アグネスに彼女の苦闘に報いるような成功をもたらすことによって、「墮ちた女性」、売春婦として当時盛んに集中砲撃を浴び、思想の戦いの餌食となっていたメアリ・ウルストンクラフトを間接的に、弁護し、肯定し、救出したのである。

クレア・トマリンは、その優れた評伝『メアリ・ウルストンクラフトの生と死』の中で、アメリア・オーピーは「はっきりと悪意の熱狂をもって彼女〔メアリ・ウルストンクラフト〕に背を向けて」<sup>55</sup>『父と娘』に着手したのだ、と述べているが、これはアメリア・オーピーの小説をあまりにも一面的にしか捉えていない発言と言える。いままで論じてきたことから明白なように、『父と娘』は決して反ウルストンクラフト的な小説ではない。それどころか、『父と娘』は、メアリ・ウルストンクラフトの擁護の書であり、友情の証の書なのである。

注

- <sup>1</sup> Mitzi Myers, 'Godwin's *Memoirs of Wollstonecraft: The Shaping of Self and Subject*,' *Studies in Romanticism* 20.3 (1981) 300.
- <sup>2</sup> Nicola J. Watson, *Revolution and the Form of the British Novel, 1790-1825: Intercepted Letters and Interrupted Seductions* (Oxford: Clarendon P, 1994) 62-63; G. J. Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain* (Chicago: U of Chicago P, 1992) 370; Catherine N. Parke, 'What kind of Heroine is Mary Wollstonecraft?,' in *Sensibility in Transformation: Creative Resistance to Sentiment from the Augustans to the Romantics*, ed. Syndy McMillen Conger (London: Associated UP, 1990) 107.
- <sup>3</sup> William Godwin, *Memoirs of the Author of the Rights of Woman*, eds. Pamela Clemit and Gina Luria Walker (Peterborough: Broadview, 2001) 45, 88.
- <sup>4</sup> *The Letters of Horace Walpole*, ed. Paget Toynbee (Oxford, 1905) XU: 131-32, 337-38 in Ralph M. Wardle, *Mary Wollstonecraft: A Critical Biography* (1951; Lincoln: U of Nebraska P, 1966) 159; Claire Tomalin, *The Life and Death of Mary Wollstonecraft* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1974) 110.
- <sup>5</sup> Wardle 159.
- <sup>6</sup> Myers, 'Godwin's *Memoirs of Wollstonecraft*' 301.
- <sup>7</sup> Nicola Trott, 'Sexing the Critic: Mary Wollstonecraft at the Turn of the Century,' in *1798: The Year of Lyrical Ballads*, ed. R. Cronin (London: Macmillan, 1998) 34; Myers, 'Godwin's *Memoirs of Wollstonecraft*' 301.
- <sup>8</sup> Wardle 162; Mary A. Favret, *Romantic Correspondence: Women, Politics and the Fiction of Letters* (Cambridge: Cambridge UP, 1993) 131.
- <sup>9</sup> Richard Polwhele, *The Unsex'd Females: a poem addressed to the author of the Pursuits of Literature* (London, 1798) 28-9; Barbara Taylor, *Mary Wollstonecraft and the Feminist Imagination* (Cambridge: Cambridge UP, 2003) 246.
- <sup>10</sup> Hannah More, *Strictures on the Modern System of Female Education*, 2vols. (London, 1799) 1: 44.
- <sup>11</sup> Jane West, *Letters Addressed to a Young Man*, 3vols. (London, 1801) 3: 344.
- <sup>12</sup> Roxanne Eberle, 'Amelia Opie's *Adeline Mowbray: Diverting the Libertine Gaze; or, the Vindication of a Fallen Woman*,' *Studies in the Novel* 26.1/2 (1994): 121.
- <sup>13</sup> 'The Vision of Liberty,' *Anti-Jacobin Review and Magazine*, 9 (1801) 518; Trott 41; Taylor 305.
- <sup>14</sup> Trott 41-42; Mitzi Myers, 'Unfinished Business: Wollstonecraft's Maria,' *The Wordsworth Circle*, vol. XI/2 (1980) 107, 113.

- <sup>15</sup> Claudia L. Johnson, *Equivocal Beings: Politics, Gender, and Sentimentality in the 1790s* (Chicago: U of Chicago P, 1995) 195; Favret 131-32.
- <sup>16</sup> Alan Richardson, *Literature, Education, and Romanticism: Reading as Social Practice 1780-1832* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 189; Tomalin 243-44; Claudia L. Johnson, *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel* (Chicago: U of Chicago P, 1988) 19-21; Janet Todd, *Gender, Art and Death* (Oxford: Polity, 1993) 146.
- <sup>17</sup> Gina M. Luria, "Mary Hays's Letters and Manuscripts," *Signs* 3.2 (1977): 528.
- <sup>18</sup> Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney* (London: Pandora, 1987) 39.
- <sup>19</sup> Jean-Jacques Rousseau, *The Social Contract*, trans. Christopher Betts (Oxford: Oxford UP, 1994) 45.
- <sup>20</sup> Charles Lloyd, *Edmund Oliver*, 2 vols. (Bristol, 1798) 1: vii.
- <sup>21</sup> Johnson, *Jane Austen* 12; Janet Todd, *The Sign of Angelica* (London: Virago, 1989) 232; Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (Oxford: Clarendon P, 1975) 108; Gary Kelly, *Women, Writing, and Revolution 1790-1820* (Oxford: Clarendon P, 1993) 149.
- <sup>22</sup> Elizabeth Hamilton, *Memoirs of Modern Philosophers*, 3 vols. (Bath, 1800) 1: 196-97.
- <sup>23</sup> Kelly, *Women, Writing, and Revolution* 159-60.
- <sup>24</sup> Maria Edgeworth, *Belinda*, ed. Kathryn J. Kirkpatrick (Oxford: Oxford UP, 1994) 229.
- <sup>25</sup> Colin B. Atkins and Jo Atkins, "Maria Edgeworth, *Belinda*, and Women's Rights," *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 19.4 (1984): 110.
- <sup>26</sup> Amelia Opie, *Adeline Mowbray* (London: Pandora, 1986) 57.
- <sup>27</sup> Fanny Burney, *The Wanderer; or, Female Difficulties*, eds Margaret Anne Doody, Robert L. Mack and Peter Sabor (Oxford: Oxford UP, 1991) 77.
- <sup>28</sup> Katherine M. Rogers, *Frances Burney: The World of Female Difficulties* (New York: Harvester Wheatsheaf, 1990) 164; Tomalin 248; Martha G. Brown, "Fanny Burney's 'Feminism': Gender or Genre?" in *Fetter'd or Free?: British Women Novelists 1670-1815*, eds. Mary Anne Schofield and Cecilia Macheski (Athens: Ohio UP, 1986) 36-37.
- <sup>29</sup> Asa Briggs, *The Age of Improvement 1783-1867* (London: Longman, 1959) 133-35; Warren Roberts, *Jane Austen and the French Revolution* (London: Macmillan, 1983) 27-28, 31; Atkinson 100-102.
- <sup>30</sup> Roberts 184; Margaret Kirkham, *Jane Austen: Feminism and Fiction* (Sussex: Harvester P, 1983) 48-50; Gary Kelly, *Revolutionary Feminism: The Mind and Career of Mary Wollstonecraft* (London: Macmillan, 1992) 224.
- <sup>31</sup> Gary Kelly, 'Discharging Debts: The Moral Economy of Amelia Opie's Fiction,'

*The Wordsworth Circle* vol. XI, No. 4 (1980): 198.

<sup>32</sup> Taylor 196.

<sup>33</sup> Janet Todd, *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life* (London: Weidenfeld and Nicolson, 2000) 381; Peter Garside, Introduction, *The Father and Daughter, A Tale, In Prose, The Romantics: Women Novelists* (Routledge/ Thoemmes P, 1995) vii.

<sup>34</sup> Tomalin 199; Ann H. Jones, *Ideas and Innovations: Best Sellers of Jane Austen's Age* (New York: AMS P, 1986) 50; Todd, *Mary Wollstonecraft* 381; Lyndall Gordon, *Vindication: A Life of Mary Wollstonecraft* (New York: Harper Collins, 2005) 326; Garside, viii.

<sup>35</sup> Garside x.

<sup>36</sup> Susan Staves, "British Seduced Maidens," *Eighteenth-Century Studies* 14.2 (Winter 1980/1): 110-12; Jones 51; Eleanor Ty, *Empowering the Feminine: The Narratives of Mary Robinson, Jane West, and Amelia Opie, 1796-1812* (Toronto: U of Toronto P, 1998) 135; Shelley King and John B. Pierce, Introduction, *The Father and Daughter with Dangers of Coquetry* by Amelia Opie, (Peterborough: Broadview P, 2002) 21.

<sup>37</sup> Carol Howard, "'The Story of the Pineapple': Sentimental Abolitionism and Moral Motherhood in Amelia Opie's *Adeline Mowbray*," *Studies in the Novel* 30.3; Gary Kelly, *English Fiction of the Romantic Period* (London and New York: Longman, 1989) 29; Jones 50; Garside xvi.

<sup>38</sup> Amelia Opie, *The Father and Daughter, A Tale, In Prose, The Romantics: Women Novelists*, ed. Peter Garside (Routledge/ Thoemmes P, 1995) 3.

<sup>39</sup> Eliza Fenwick, *Secresy, or The Ruin on the Rock*, 3 vols. (London, 1795) 1: 117.

<sup>40</sup> Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney* (London and New York: Pandora P, 1987) 18-19.

<sup>41</sup> Charles Lloyd, *Edmund Oliver* (Bristol, 1798) 1: 97.

<sup>42</sup> 実は、感受性の捉え方は保守主義作家と急進主義作家とでは、異なる。エリザベス・ハミルトンやジェイン・ウェストなどの保守主義作家は、過度の感受性を否定的に捉え、逸脱的・破壊的な女性の性的ありようを示すものと見なし、危険視する。一方、メアリ・ヘイズやイライザ・フェンウィックなどの急進主義作家は、感受性を肯定的に評価し、自由で因習に囚われない女性の性的ありようを示すものと捉える。Mary Nyquist, 'Wanting Protection: Fair Ladies, Sensibility and Romance,' in *Mary Wollstonecraft and 200 Years of Feminists*, ed. Eileen Janes Yeo (London and New York: Rivers Oram P, 1997) 76; Ty 59, 198.

<sup>43</sup> Johnson, *Jane Austen* 11; Kenneth L. Moler, *Jane Austen's Art of Allusion* (Lincoln: U of Nebraska P, 1968) 203-4.

- <sup>44</sup> Janet Todd, *Gender, Art and Death* (Oxford: Polity, 1993) 116-17.
- <sup>45</sup> Todd, *Gender, Art and Death* 102; Dorinda Outram, *The Body and French Revolution : Sex, Class and Political Culture* (New Haven: Yale UP, 1989) 93.
- <sup>46</sup> Butler 118.
- <sup>47</sup> Garside xvi.
- <sup>48</sup> Mary Wollstonecraft, *Vindication of the Rights of Woman*, vol 5 of *The Works of Mary Wollstonecraft*, ed. Janet Todd and Marilyn Butler (London: William Pickering, 1989) 140.
- <sup>49</sup> King and Pierce, 17.
- <sup>50</sup> Gary Kelly, 'Amelia Opie, Lady Caroline Lamb, and Maria Edgeworth: Official and Unofficial Ideology,' *Ariel* 12.4 (1981): 7.
- <sup>51</sup> Kelly, 'Amelia Opie, Lady Caroline Lamb, and Maria Edgeworth,' 7.
- <sup>52</sup> King and Pierce 17.
- <sup>53</sup> Todd, *The Sign of Angelica* 232.
- <sup>54</sup> King and Pierce 16.
- <sup>55</sup> Tomalin 235.